
まっさんが幻想入りシリーズ～将棋対決！咲夜VSチルノ～

ソースケ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

まつさんが幻想入りシリーズ〜将棋対決！咲夜VSチルノ〜

【Nコード】

N4476G

【作者名】

ソースケ

【あらすじ】

今日は日曜日。まつさんは新しく始めた、文々。新聞に掲載する観戦記を書くという仕事をするためにいつも将棋が行われている茶屋に向かうと、意外な二人が向かい合って将棋を始めるところだった。その二人は完全に瀟洒な従者とまで言われる十六夜咲夜と、なぜかまるきゅーと呼ばれているチルノで・・・。

（前書き）

キャラ大崩壊気味です。

特にチルノは原形をとどめていないかもしれません。

あと、できる限り雰囲気味わってもらえるように書いたつもりですが、将棋のルールをご存じない方はあまり楽しめないかもしれません・・・。

「メイド・ニーソ・PAD長」

と、一人の若い男が適当に節をつけながら、そんなことをつぶやいて歩いていた。

着流しをいなせに着こなしている相当な美男子で、歳は20歳前半ぐらいだろうか。

手にしていた扇子が、歳と容貌に似合っていなかった。

彼は一年ほど前に外の世界から幻想郷にやってきた、外人である。幻想郷の住民たちからは、『まっさん』などと呼ばれていた。

将棋のプロになる、という夢に破れ、町はずれをさまよっているうちに偶然にも幻想郷にたどり着いたのだ。

幸いにも幻想郷にも将棋は存在し、そして幻想郷の将棋のレベルはプロを目指していた彼からすれば、それほど高いものではなかった。あつという間に彼は幻想郷最強の将棋指しとして有名になり、今は幻想郷の住民に将棋を教えたり、棋書を発行して生活している。

さてさて、今日は日曜日だった。

幻想郷にももちろん、月日や曜日の概念はある。

そして、外の世界でもそうであるように、日曜日は大半の幻想郷の住民がお休みする日なのであった。

彼は、行きつけの茶屋に向かっていた。

日曜日にそこに行けば、たいてい誰かが将棋を指していて、そしてそれをたくさんさんのギャラリーが囲んでいる。

それを見に行くのは彼の楽しみでもあり、最近始めた仕事でもあった。

そこで行われている将棋を見て、観戦記を書くのである。

その観戦記は、射命丸 文が発行している文々。新聞に掲載される。

彼の書く観戦記はウエットとユーモラスに富む文章で、面白い文章というだけでなく、将棋の解説も初心者から上級者まで参考になるとなかなか好評だった。

おかげで発行部数がだいぶ増えたと、文も笑いが止まらないらしい。娯楽の少ない幻想郷では、囲碁将棋というのはもっとも身近で親しみやすい、娯楽の王様なのであった。

今日もやはり、茶屋の前の縁台にたくさんのギャラリーが詰め掛けている。

しかし、今日はその人数がずいぶん多いような気がする。

「ちよいと、ごめんよ」

まっさんがギャラリーたちにそう声をかけると、「お、先生。来たね」とギャラリーたちは彼のために縁台までの道を空ける。

幻想郷の人間の中で最も将棋の強い彼はちよつとした有名人だったし、囲碁将棋の強い人間、というのは幻想郷では尊敬の対象なのであった。

分厚い弾幕の張れる少女たちが、『強い』と称されるように。

「お……。珍しい対局だな」

将棋盤をはさんでいる二人の顔を見て、まっさんは思わずつぶやいた。

対局者の二人の顔は、見知っている。

まっさんの声を聞いて、二人の対局者が同時に彼のほうに顔を向けた。

一人は、流れるような銀髪を持つ、美しい少女だった。

名前を十六夜咲夜といい、普段は紅魔館という屋敷で、メイド長を勤めている。

今日は休みが取れたのだろう。

ちなみに彼女は冒頭の節とは何の関係もない。

たぶん。

今日の咲夜はもちろん仕事着のメイド服ではなく、グレイのニット

ワンピースを潇洒に着こなしていた。

足元には可愛いパンプス。

まあ、彼女ほどの素材なら、どんな服でも違和感なく着こなしてしまっただろう。

その咲夜の前に対局者として座っていたのは・・・幼い雰囲気をした、蒼い髪をもつ大きな瞳の、可愛い少女だった。

ただ、普通の人間の女の子とは違い、透けるくらい薄い羽根を6枚、その小さな背中にも有している。

彼女は、氷の妖精なのだ。

名前をチルノという。

ただ、彼女は氷の妖精としてよりも、ある面で人々に圧倒的に有名だった。

幻想郷の住民たちの間で言われていること。

それは『彼女にちょっとしたいを出して攻撃されそうになったら、とっさになぞなぞを一問出せ。どんな簡単な問題でも考え込んでしまつて、決して解くことができないから』。

つまり、チルノは『バカだ』と思われているのである。

そして彼女はなぜか『まるきゅー』と呼ばれていた。

完全に瀟洒なメイドと、まるきゅーの将棋の対決。

人々の興味は『どちらが勝つか』ではなかった。

このバカな妖精が、十六夜咲夜にどれだけボコボコにされるのか。

そんな底意地の悪い空気が、あたりを支配していた。

咲夜は軽くまっさんに会釈し、チルノのほうは「あたい、あんたに将棋を教えてもらって結構勉強したよ」と、駒を並べながら笑顔で話しかけてくる。

「そうか、それは楽しみだな。お姉さん、すまないがイスを一つ持ってきてくれ」

まっさんがちらり、と二人の様子を見ながら茶屋の給仕にそう頼むと、はい、と返事があつてすぐにイスを持ってきてくれた。

彼はその給仕にありがとう、と礼を言い、そのイスに腰掛けると、観戦記を書くために携帯用の筆とメモ用紙を懷から取り出す。

「なあ、先生」

ギャラリーの一人が、まつさんに小さな声で耳打ちしてきた。

「なんだい？」

「こういつちやなんだが・・・十六夜咲夜とチルノじゃ、観戦記に書くような将棋にならないんじゃないかい？そりゃ、どんな将棋でも面白く書くのが、あんたの技術だと思うんだが」

咲夜は強い。

チェス仕込みの咲夜の攻め将棋は強烈で、平手で彼女に勝てるのは幻想郷に5人もいないだろう。

「そうか？俺は結構、面白い将棋になると思ってるよ」

そういうまつさんの表情は、真剣だった。

しかし、彼はそれに気づかなかったようだ。

「まあ、ある意味面白くなるんだろうけどよ。先生の観戦記で勉強してる俺からすれば、あんまり参考にならない将棋は見たくないんだよね」

そんなやりとりをしているうちに、先手後手を決める振り駒が行われる。

駒を振ったのは咲夜。

将棋では普通、上位者のほうが駒を振って、その出た結果によって先後が決まる。

『あたいつてばサイキョーね』が口癖のチルノも、まつさんに『将棋の先輩に振ってもらうのがマナー』と教えられていたので、それに関しては特に文句を言わなかった。

振り駒の結果は、歩が2枚、と金が3枚でチルノが先手。

『お願いします』

二人の少女が同時にそう頭を下げ、対局が始まった。

戦形はチルノの四間飛車に、咲夜の棒銀という古典的な将棋になっ

た。

ギャラリーからは「チルノがそこまで組めたか。感心感心」なんて軽口が飛び出す。

咲夜は居飛車党で、振り飛車には基本的に急戦で挑むタイプである。左美濃や居飛車穴熊、引き角なども指せないこともなかったが『持久戦は肌に合わない』らしい。

特に後手引き角がお気軽に召さないようで、『結果が千日手でもよし、なんてのは私には到底納得できない』とのこと。

後手で引き分けなら御の字、といわれるチェスでも咲夜は引き分けを嫌って無理に局面を開きようとするぐらいである。

ちなみにまつさんがやってくるまで、対振り飛車の居飛車持久戦戦法は、まったく定跡化されていなかった。

どうやら幻想郷の将棋の戦法の歴史は、現在の将棋のルールになってからあまり進歩していなかったようである。

しばらくは教科書どおり、定跡どおりに局面が進む。

はっし、と咲夜が6筋の歩をついた。

咲夜とチルノの歩がぶつかる。

（さて、チルノはどうするか）

咲夜のその手に応手はたくさんあるが、正解は一手だけ。

もちろんまつさんは答えを知っている。

それ以外を指してしまうと、一方的に押さえ込まれてしまう。

しかもその手は、なかなか独力で気づくのは難しい。

勉強していないと、指せない手だ。

しかし、チルノはノータイムで自分の王様の守りを形成している金で、その歩の進撃を受け止めた。

その手を見て、ギャラリーたちが『なかなかやるな』と感嘆の声を上げる。

この手は王様の守りが弱くなるような気がして、勉強していてなお

かつ、後の変化に自信がないと指せないのだ。

「そう。ちゃんと勉強してるのね・・・」

ふう、と咲夜がため息をついた。

こう指されると、棒銀側も一気に攻め立てることができなくなる。

「弾幕であなたを叩き落とすよりかは、面倒なことになりそうね」

そんな咲夜の軽口にも、チルノは盤上をにらんでいるだけ。

無視したのか、聞こえてないのか。

とりあえずチルノが将棋に集中していることだけは、確かなようだった。

中盤の終わりを迎えてもチルノは大きく崩れることなく、堅実な手を重ねて局面を指し進めていた。

（振り飛車のほうがいいか・・・？）

（まだ互角だと思うが・・・）

（十六夜咲夜は急戦狙いだからな。長引けば玉の薄さが・・・）

（でもチルノのほうも一枚金を左に使っちまってるから、そんなに堅くないんじゃないか？）

ぼそぼそと、ギャラリーたちからそんな声が上がる。

将棋のプロを目指していたまつさんの形勢判断は、『まだまだ互角。これからの勝負』だったのだが・・・。

「・・・っ。しつこい・・・」

難しい局面で自分の手番に少考していた咲夜が、綺麗な顔をゆがめ、銀髪をかきむしり、ぽろりとそんな一言を漏らす。

おそらく、無意識のうちに発せられた言葉なのだろう。

チェスの上級者でもある咲夜は、将棋を覚えてから、ハンデ戦はともかくとして、平手ではいつも全力を出すまでもなく勝ち続けてきた。

それが今、チルノに苦戦を強いられている。

あつてはいけないことだ・・・とまでは思わなかったにしろ、内心相当イラついているのは、確かだった。

それからすぐに咲夜は勢いよく盤上の銀を突き出した。

「うおっ！」

「強い手だな・・・」

「決めに出たな」

歩頭への銀捨て。

それを見たギヤラリーが、大きな歓声を上げる。

駒の損得に敏感な咲夜が（チェスは将棋より駒が少ないため、マテリアルアドバンテージを将棋よりシビアに考える傾向がある）駒を捨てに出る、ということは勝利を確信しているということだ、とギヤラリーは感じ取ったのだらう。

しかし。

（咲夜ちゃん、あせってるな・・・）

まっさんからみて、それはすこし無理気味な手だった。

相手が咲夜よりも相当弱いのなら、その手でも圧倒的な終盤力で楽にねじ伏せることができるだろう。

だが、チルノの棋力はほとんど咲夜と変わらないようだ。

彼女は自分の与えた棋書を相当読み込んで勉強したらしい。

咲夜の指した手は、すぐさま敗着につながるような悪手ではない。

それでも、かなり危険な手であることには間違いなかった。

それから咲夜は攻めに攻めた。

その攻めを受けて、チルノの美濃囲いは崩壊寸前である。

しかし、その美濃囲いを破壊するために、咲夜も相当数の駒をチルノに渡してしまっている。

攻めが途切れたら、駒損だけが残ってしまい、ほとんど負けになってしまう。

（・・・どうだ？）

（わからん。十六夜咲夜が攻めきってしまう、と思うんだが）

（いつもなら、そうなるよな・・・十六夜咲夜の攻めは強烈無比だからな）

ギャラリーたちは二人の少女の気迫に押されたのか、周りにはばかるような小声で、二人の将棋を論議する。

まっさんは真剣に、二人の将棋を観戦していた。

もちろん技術的には、アマ有段程度の彼女たちの将棋から学ぶことは何もない彼だったが・・・。

そこには確かに、プライドと意地をかけた勝負の熱が存在した。

傍目には攻めている咲夜のほうが有利に見えるのだが、その攻めは相当細く、一手間違ったり、チルノのほうに妙手の受けがあったりしたら、あっさりと形勢はひっくり返ってしまうかなりきわどい局面だった。

そのきわどい局面で、咲夜が竜切りという強手を放った。

その手を見たギャラリーたちが、無言のまま縁台に一步にじり寄る。決まった。

これで十六夜咲夜の勝ちだ。

後はチルノがこれをとって、咲夜がチルノ玉を寄せる手続きをとるだけである。

みな、そう思っていた。

まっさんと、追い詰められているはずのチルノを除いて。

チルノは咲夜の竜とぶつかっていた金をつまむと、彼女の竜を取ってしまうのではなく、すっと綺麗な手つきでそれを一段目に引いた。
「！！！」

その手を見た咲夜の顔から、さあっ・・・と血の気が引く。

比喻ではなく、攻めている興奮で紅色の差していた彼女の綺麗な頬が、まるで病人みたいに瞬時に青くなったのだ。

これでもう、咲夜の攻めは続かない。

そして、ギャラリーから大きなどよめきが起こった。

「そんな手が・・・」

「これで続かないのか・・・」

ギャラリーの視線が、チルノに集まる。

彼らがチルノを見つめる視線は、いつもの小ばかにしたようなもの

ではなく、畏敬と尊敬に満ちたものになっていた。

これで咲夜に残された勝利のチャンスは、チルノのミスしかなくなつた。

咲夜は力なく、今まで強烈なブレスを敵陣で放ち続けていた竜を、自陣に引き上げたのだつた。

それから粘りに粘つた咲夜だったが、チルノの反撃はすさまじく、あつという間に船囲いは崩壊してしまう。

チルノが送りの手筋に角を放つた瞬間だつた。

青ざめていた咲夜の顔が、かつ！と耳まで赤く染まる。

「くそっ！」

咲夜は駒台に置かれていた駒を左手で握りこむと、ばしっ！とそれを将棋盤に投げつけて、挨拶もせず縁台から立ち上がるうとする。それは、普段の彼女からは考えられない悪態だつた。

チルノとは、何度か弾幕勝負をしたことがある。

妖精の中では最上級の力を持っている、といっても、所詮咲夜の敵ではなかつた。

もちろん咲夜は、この妖精に一度たりとも落とされたことはない。

いつも圧倒的な実力の差を見せ付けて、ナイフをチルノに叩き込んで勝利していた。

それが、よりによって頭脳ゲームである将棋で・・・。

その事実、咲夜のプライドを傷つけるのに十分だつた。

「咲夜ちゃん！」

まつさんが去つていこうとする咲夜を、大きな声で呼び止めた。

プロを目指した彼にとって将棋は芸であり、道である。

特に彼は、アマチュアの人には勝ち負けよりも、マナーや礼節、そして思考力や集中力などを将棋から学んでほしい、と切に願つていた。

そんな彼が、いくら負けて悔しいとはいえ咲夜のああした悪態を許しておくことは到底できなかったのである。

「負けて悔しいのは痛いほどわかるが、挨拶ぐらいはしたらどうだ。勝負で負けて、人間性でも負けてすごすご立ち去るつもりなのか、咲夜ちゃんは」

普段お気楽な感じで生きている彼からは、少し想像のつかない厳しい言葉だった。

彼はそれだけ将棋を愛しているのである。

片思いの、咲夜と同じぐらいに。

「うつ・・・くつ・・・」

厳しい正論を突きつけられ、悔しさと恥辱に震えを隠せない咲夜だったが・・・。

そこはさすがに、完全で瀟洒な従者である。

一呼吸して震えをとめ、瀟洒に再び縁台に腰掛けると、

「・・・負けました」

と、駒台に手を置いて、チルノに深く頭を下げる。

それを受けてチルノも、

「ありがとうございます」

と返したのだった。

それでもやはり負けた悔しさは隠せず、ぶっきらぼうに

「ありがとうございます」

と挨拶を返すと、咲夜はさっさとその茶所から姿を消してしまった。おそろく、紅魔館に帰ったのだろう。

時間帯はちょうど昼食時だったが、負けた将棋の後の食事ほどまずいものはないので、とても食べて帰る気にならなかったに違いない。

「あの十六夜咲夜がなあ・・・よっぽど悔しかったんだな」

ギャラリーの一人のそんな言葉に、周りのギャラリーもうんうん、と同調して首を振る。

「しかし、十六夜咲夜を平手で負かしてしまうなんて。強いな、チ

ルノ」

最初にチルノを小ばかにしていた男が、今ではすっかり尊敬のまなざしで彼女を見つめている。

「いや・・・それほどでも」

そういうチルノに、男は拍子抜けしたような表情を浮かべた。

てつきり、いつものように『当たり前よ、あたいつてばさいきょーね！』ぐらい強気な返事が返ってくるものだと思っていたのだが。

「チルノは、少々将棋に自信をつけたんだな。だから、下手に虚勢を張る必要がないんだよ」

諭すように、まっさんは男にそういった。

そう、チルノが普段、つまらないと思える虚勢を張っているのは、弾幕勝負に自信がないからだ。

弾幕は精進や努力で何とかなるものではなく、ほとんど生まれ持った才能で具現できるスペルが決まっているとっていい。

チルノがいくらがんばっても、妖夢や幽々子、紫クラスの超弩級弾幕を張ることはできないのだ。

でも、将棋は違う。

プロレベルを目指すならともかく、アマ有段者ぐらいまでは努力すれば遅い早いはあるにしろ、たいていの人はたどり着くことができる。

そしてその実力は、生きていくうえで、少なからずがんばった自分への自信になるのだ。

「いい将棋だったな。面白い観戦記が書けそうだ。記事を清書して文ちゃんに提出しないといけないんで、今日はこれで失礼するよ」
まっさんはメモを懐になおしこむと、ギャラリーたちに別れの会釈をして、久しぶりに触れた真剣勝負の熱にうれしさを感じながら、帰路に着いたのだった。

咲夜VSチルノの観戦記が掲載されたのは将棋の行われた3日後で、その新聞は二人の話題性とチルノの勝利という意外性、それに今幻

想郷で流行っている振り飛車VS居飛車急戦の将棋であったということもあり、文々。新聞史上最高の売り上げ部数を記録した。たかが将棋で・・・と思うことなかれ。

外の世界の新聞でも将棋の記事が載っているのは、その記事を目的にして購入している層が少なからずいるからなのである。

その観戦記の最後の一文。

『その場にいたギャラリ―たちはチルノの勝利に驚いたようだったが、私はまったく驚かなかった。彼女がどれだけの修練を積んできたのかは、将棋を始める前の駒の並べ方と、人差し指にできた駒ダコを見て、十分すぎるほど感じられたからである。あれほど美しい手つきで丁寧な駒を並べる将棋指しは、幻想郷において彼女しかないであろう。チルノの精進と将棋に対する姿勢に、敬意を表したい』

終わり

（後書き）

まずは謝罪から・・・。

長らく更新しないままにしまして、まことに申し訳ありませんでした。

ちよつと、エッチなSSのほうに力を入れていたものでして・・・。
ともかく、久しぶりのSSを最後までお読みいただき、ありがとうございます。
ございました。

いかがだったでしょうか。

東方二次創作の中でも結構異色、もとい変なSSになってしまったので、楽しんでくださった方がいるかどうか、結構不安なんです。

うんまあ、こういったキャラの崩し方もありかな、と思ひまして。
あと弾幕のスペル具現化については私個人の見解なので、あまり突っ込まないで下さると助かります。

将棋に関しましては、私自身、好きなだけでそれほど強いわけではありません。

棋力は一応ペーパー初段で、実力4級ぐらいですね。

ネット将棋では・・・。

あまりに恥ずかしいので、ここでレートをさらすのはやめておきますw

ただ、将棋に関する本を読むのが好きで、棋士のエッセイや将棋関係者の出版している棋士や奨励会員の小説などは、結構読み込んでいます。

彼らの話には、何か胸を揺さぶられるものが常にありますね・・・。
特に奨励会員の話は、私も昔文章のプロを目指していた時期があったので、苦勞はまったく比べ物になりませんが、多少共感できると

ころもあり、ついつい感情移入してしまうこともあります。

18禁も含めて、いっぱい書き散らしていてまとまらないよ！と叫んでみても仕方ないので、ひとつずつ片付けていくつもりです。私のSSを読んでくださっている方には大変申し訳なく思うですが、気長にお待ちくださると作者としては大変うれしいです。

いつまでに、とはお約束できませんが、今連載しているものは、必ず完結させますので・・・。

ではまた、次の機会にお会いしましょう。

この作品は東方プロジェクトの非公式二次創作小説です。

東方プロジェクト本元

上海アリス幻樂団様：<http://www16.big.or.jp/~zun/>

参考にさせていただいたゲーム

東方妖々夢・東方紅魔郷・東方緋想天

参考にさせていただいた書籍

東方求聞史紀

シューティングが苦手な方でも楽しめるゲーム（かく言う私も東方が気になってファミコン以来久しぶりにシューティングで遊びました。面白いですよ）ですので、気になった方はぜひ、プレイしてみてください。

緋想天は黄昏フロンティア様（<http://www.tasofro.net/>）が手がけていらっしゃる弾幕型格闘ゲーム（?）です。

こちらはネット対戦もできて大変盛り上がっています。

「もちろんぜひ、プレイしてみてください。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4476g/>

まっさんが幻想入りシリーズ～将棋対決！咲夜VSチルノ～

2010年10月9日17時38分発行